

関東大震災から100年

あの日を忘れずに

その日に備える



本町四ツ角の焼け跡

関東大震災を引き起こした「関東地震」とは どんな地震・・・？

1923年（大正12年）9月1日11時58分に神奈川県西部の深さ
23kmでマグニチュード7.9の地震が発生。

- ・この地震により埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、山梨県で震度6（※）を観測したほか北海道道南から中国・四国地方にかけて広範囲で震度5から震度1を観測。
- ・また、相模湾から房総半島で数メートルから10メートルを超える津波を観測しました。

※当時の震度階級は震度1から6まで（当時の震度6は現在の6弱、6強、7を含む）

関東地震による 「関東大震災」の被害の概要

- ・地震発生が昼食の時間と重なった事から、多くの火災が起きて被害が拡大しました。
- ・また、地震による家屋倒壊や道路や橋脚の損壊、津波、土砂災害なども発生し、死者・行方不明者は10万5千人余（理科年表より）にのぼりました。この地震によって生じた災害は「関東大震災」と呼ばれています。

府 県 名	死	傷	不 明	家 屋				
				全 潰	半 潰	焼 失	流 失	計(除半潰)
神 奈 川 県	29,065	56,269	4,002	62,887	52,863	68,569	136	131,592
横 浜 市	23,440	42,053	3,183	11,615	7,992	58,981		70,496
横 須 賀 市	540	982	125	8,300	2,500	3,500		11,800
東 京 府	68,215	42,135	39,304	20,179	34,632	377,907		398,086
東 京 市	59,065	15,674	1,055	3,886	4,230	366,262		370,148
千 葉 県	1,335	3,426	7	31,186	14,919	647	71	31,904
千 埼 県	316	497	95	9,268	7,577			9,268
山 梨 県	20	116		1,763	4,994			1,763
静 岡 県	375	1,243	68	2,298	10,219	5	661	2,964
茨 城 県	5	40		517	681			517
長 野 県				45	176			45
栃 木 県		3		16	2			16
群 馬 県		4		107	170			107
計	99,331	103,733	43,476	128,266	126,233	447,128	868	576,262

計は府県の合計。

神奈川県被害状況（新編 日本被害地震総覧より）

関東地震は火災や火災旋風による死者や家屋の消失などの被害が大きく注目されていますが、神奈川県では地震動（地震による揺れ）による家屋の倒壊、道路や橋脚等の損壊、山崩れなどの被害が大きく、また、津波による被害も発生しています。

津波は相模湾周辺と房総半島の南端で数mの高さでした。なかでも、熱海と伊豆大島（岡田）で最大12m、館山付近で最大9mでした。

秦野市の被害

旧町村名	大正 12 年震災時		住家被害					人的被害			倒壊率 (%)
	人口	戸数	全壊	全焼	半壊	半焼	流出 その他	死者	行方不明	負傷者	
秦野町	10,273	2,013	351	232	1,457	5	—	21	1	27	17.44
南秦野村	4,975	728	208	—	285	—	—	24	2	40	28.57
東秦野村	4,756	720	218	1	290	—	14	31	—	17	30.32
北秦野村	3,317	518	141	—	162	—	11	15	1	18	27.22
大根村	3,710	581	348	—	175	—	—	53	6	22	59.9
西秦野村	4,939	807	153	—	62	—	—	18	—	6	18.96
上秦野村	2,027	329	71	—	209	—	—	9	—	5	21.58
合計	33,997	5,696	1,490	233	2,640	5	25	171	10	135	



震生湖の土砂崩れ



曾屋神社

? 知っていますか?

震生湖は、関東大震災により斜面が250メートルにわたり地すべりを起こし、滑落した土砂が、市木沢を閉塞（へいそく）して出来た堰き止め湖です。地元の有志によって災害直後の大正 13 年（1924 年）に『震生湖』と名がつけられました。



関東大震災の遺構【震生湖】



土砂災害で崩れた痕跡を、湖畔に通じる道路わきに見ることができます。



湖畔にある寺田寅彦の句碑
「山さけて なしける池や 水すまし」
(昭和 30 年 9 月 1 日建立)



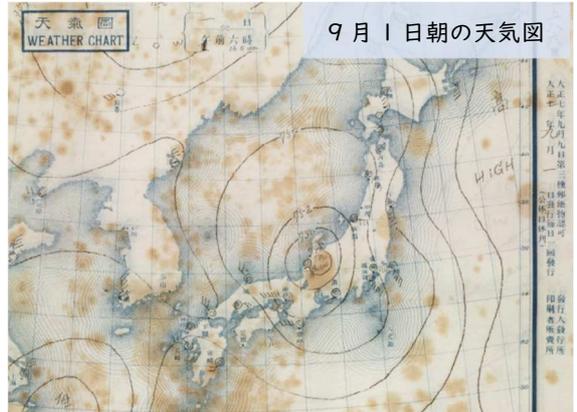
西側には、令和 4 年 9 月建立された
新しい寺田寅彦の句碑もあります。
「そば陸稲 丸う山越す 秋の風」



関東地震による山道の崩壊により、下校中の2人の少女が行方不明になり捜索がされましたが、結局発見されませんでした。この2人の供養のため、当時の南秦野村の有志が翌年の大正 13 年 10 月 1 日にこの供養塔を建立しました。



関東大震災の記念碑【古峯神社】



日本海沿岸を進んだ低気圧(台風)の動きによる風向の変化で延焼の方向が変わったらしい。

秦野市の中心市街地で、地震により271戸を焼失する大火が発生しました。説明板によると、火は古峯神社の手前で鎮火したということから、火伏せの神として地域の守り神として根付くことになりました。



武村雅之「神奈川県秦野市での関東大震災の跡-さまざまな被害の記憶」

『歴史地震』第26巻、歴史地震研究会、2011年、8頁



本町四ツ角の焼け跡

関東大震災体験記

この体験記は、秦野地方にも大きな被害をもたらした関東大震災の貴重な体験談を記録として後世に伝えるために、執筆者の了解を得たうえで一部を抜粋し、掲載しています。

なお、文意を損わない範囲での整理、省略を行っていますので御了承ください。

弟を背負い医者に行ったが・・・

(上今川町 男性)

雑談をしながら仕事をしていた。ちょうど昼頃、突然の大きな揺れに使用人達も右往左往していたが、ここは落ちてくる物もないので安心だと皆んなに言ったが、やがてガラスの割れる音などの恐ろしさで、大通りにころげ出たが、立つことはむろん歩くことなど出来ず、四ツん這いになり、波のように揺れ動く道路や家を見ていた。

やがて揺れも安定し、家族の者が心配で家の中に入っていったが、土けむりがもうもうとしており、祖母達に声をかけていたら、蔵と土壁のくずれた下より祖母が助けてくれと呼ぶ声がしたが、土壁などを動かそうにも一人ではどうにもならず、近所にいた人達を呼び集め助け出したものの、祖母が抱いていた弟は、土壁と祖母の間で動かずにグッタリとしていた。祖母は早く医者に連絡をとったが、こんな時に医者など来ようはずもなく、弟を背負い医者に行ったがすでに窒息死してしまっていた。

子を亡くした母の声と半鐘の音

(尾尻 男性)

二人の女の子は、地震を感じ、いったん外に飛び出したが、あまりの恐ろしさに、再び屋内へかけ戻り、梁の下敷きになってしまったということである。この類の話は後にもよく聞いた。

外が安全か、内が安全かは、その周囲の状況や家屋の構造、耐用年数などによって差違があろうが、家族一同、皆知っておく必要があるだろう。

もう一つ恐ろしいのは火災である。ふだんは静かなこの秦野の町も、長時間にわたって半鐘が鳴り響き、夜は赤々と空をこがし、火の粉がふりしきったのである。

私は、震災記念日が来る度に、忘れたくも忘れられないあの日の恐ろしい光景を思い出す。我が子をなくした母が、一晩中、我が子の名を呼び、泣き叫ぶ声と、鳴り響く本町の火災の半鐘の音に、罹災者一同、泣いて過した夜の不安と絶望が、今もなお強烈に胸のうちに思い起こされるのである。

地震で湖ができた

(入船町 男性)

平沢の山が割れて大きな谷が出来ている、と聞いて見に行った。深い谷が出来ており、中には、大木が沢山有り高さは相当高かった。その後、再び友人と出かけて行った時には、細い枝の先が一寸見える湖水に成っていた。閑院宮様が演習に来られ、これを見て、地震で出来た湖水だから震生湖と名を付けられた。

倒れた腹の下で地面がパッキリ口をあけて

(名古屋 男性)

竹藪に逃げようとして、両手両足をつっぱって無中になっている時、道路の一部が急に陥没して、私の腹の下へ、パクリパクリと地面が口をあけて迫ってきました。目の前には、五・六メートル前の山が崩れて、その土砂が勢いよく生物の様に、私の頭の上のしかかって来るようでした。その時の恐ろしさは、文字にも、言葉にもとても形容できません。

私の倒れている目の前に家が倒れかかり

(ひばりヶ丘 男性)

9月1日は、朝から雨が降っていた。小学校は暑中休み明けの登校日、11時頃からか雨は止み、薄暗い曇り天日で蒸し暑かった。学校は、登校日だったので、11時頃終わって、それぞれ帰宅の途中だったかと思う。自分は、たしか掃除当番が終わり、家が学校に近かったので帰宅し、昼食が終わった直後の出来事だった。“地震だ”と思った途端に大地震になった。始めのうちは、震度四位だったかと思うが、その途端上下動となり、座ってさえもいられない始末でどうすることさえも出来ず、手当り次第の物につかまっている始末だった。自分は無心に家外に出た様なものの、続いて来る大地震でどうすることも出来ず、只、地面に伏しているだけだった。自分が倒れている目の前では、家がだんだん倒れて来るのが見えているに係らず、逃げることも出来ない始末だった。幸いにして潰れないで済んだから、いままで生きていることが出来たものの、もし潰れていたら、当然、下敷となって命はなかったと思う。多くの人達は皆、自分の様な状態で命を失い、又は、負傷したことであっただろう。そんな時間は、相当続いて居た訳だが、少し静かになるや、今度は、火事のさわぎだった。火元は、我が家より三百メートル位しか、離れておらず、農家だったので煙りは、一面空を覆って燃え、無気味な音もすさまじく聞こえた。それは、生地獄と表現してよいことだろうと思う。“火事だ火事だ”と言っているが、水はなく、又誰ひとりとして火事現場に駆けつける人もなかった様だった。たまたま風は、反対方向に吹いていたからよかったものの、でなければ、私達は本当に、無一文となった事でしょう。火事は、水がなく何遠慮なく、燃え続けて三日間位燃えていたと思う。したがって四ツ角を中心として四面、町の中心部分を焼失してしまったわけである。

夕方になり一様に平静を取りもどし、食物・水の心配が出て来た。私達の住いの一角は、共同炊事をすることにしたが、米の心配やら水の心配をしなければならなかった。水は近所の何処にもなく、唯一箇所だけ四ツ角に水が出る言うことで、男は水汲み役と言ったところだった。その晩は、一・二個のむすびの配給で一夜を余震におびえ、夜空に映る火を眺めながら一夜を明かしたのであった。

朝になり昨夜汲んで来た水を見たら、バケツの底に薄く土がよどんでいた。昨夜は、みんなが、この水を飲んでいただなあーと、顔を見合わせる始末だった。

地すべりで児童二人が生きうめ

(名古屋 男性)

東秦野村学校が統一される事に決定され、取りこわしが始まりましたので各学校の生徒は、寺の本堂で教育を受けて居りました。地震の起った時、児童が休み時間で表にいたとき地すべりが起こり、寺の東側の山が高さ五十メートル、巾七十メートルにわたり地すべりし、児童二人が、生きうめとなってしまった。村の人や消防団が総出で探したが、とうとう見つけ出すことが出来なかった。この二人がいとこ同志であったので、後に、いとこ地蔵を寺に建て供養した。

おわりに

- 全国どこでも被害をもたらす地震は発生します。
- 地震は予知できません(今日・明日起こるかもしれない)
- 命を守るために最も大切なのは事前の備え!(自助が重要)
- 地震発生時はまず自分の身を守ることが大切
- 発災後の行動は人それぞれ異なります。(自分にあった行動を)
- 関東地震(関東大震災)から100年、その日に何が起こったのか、私たちは次の大地震へ向けてどのように備えたらいいのかを考えることも地震災害の備えにつながります。

